

【小学校】

はじめに

平成 16 年 2 月文化審議会から「これからの時代に求められる国語力について」答申が出された。“人々の生活を取り巻く環境がこれまで以上に、急速に変化していくことが予想される「これからの時代」を考えると、国語力の重要性について改めて認識する必要がある”とし、“学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある”と提言されている。

言葉が伝達手段として十分に機能し、自己を表現するためには、相手や場面にふさわしいものでなくてはならない。また、言葉の在り方は、人間関係の在り方にも大きな影響を及ぼしている。

これから事例として紹介する石川県金沢市立米泉小学校は、「国語力を高める」ことを学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成している。学校体制として校内研修がどのように行われ、どんなふう

に研究内容や研究体制が構築されていったのかをみていきたい。

石川県金沢市立米泉小学校の事例

1 学校の概要

石川県金沢市立米泉小学校（以下、米泉小）は、伝統と文化と自然に恵まれた石川県金沢市の西南部の住宅地に位置し、遠く山並みを望む河畔に校舎が建てられている。創立以来 21 年余、国語科教育を学校の中心に置き、言葉のもつ働きを大切にして歩み続けている。

2 研究の在り方とテーマの設定

平成 14 度から 3 年間、教育課程研究開発学校として「自己表現力の育成 - 自己表現力の育成を目指した国語科と他教科との関連による教育課程の改編 -」に取り組んでいる。本研究に記載されている内容は、学校教育法施行規則第 26 条の 2 の規定に基づき、教育課程の改善のために、文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究である。この研究を推進するために行われた「校内研修」における先生方の姿勢は、「子どもたちを中心に据えている」ということで一貫しており、本県での取組に、大いに参考になると考える。

米泉小では、次に示す内容で研究の在り方とテーマが設定されている。

(1) 研究開発課題設定の理由

米泉小の児童の実態を見るに、発達段階に応じた成長に比べ幼さが残る傾向が強く、現状に満足し不足を感じたり、自分たちから新しい活動や考えを求めたりすることが少ない。学習面では、教師から指示された内容や反復練習、マニュアル化された学習についてはまじめに取り組む児童が多い。また、言語を通して相手に分かりやすく「伝え合う力」も少しずつ育ちつつある。しかし、目的意識をもって学習に関わり、自分なりにとらえた自分らしい考えをもつことが苦手な児童が多く見られ、学習の場でつかんだことを他の教科や実生活の場に生かしきれてはいない。以上の実態から見えてくる課題は、自己の問題として前向きに考える一人一人の児童の育ちであり、児童自らが考え自分らしく表現したことを認め合える環境作りである。さらには、実生活の場でも生き生きと表現し、新しいものも生み出すことのできる創造性のある児童を育てることが大きな課題と言える。

これらの課題を解決するためには次のような研究をしていきたい。まずは、「自己表現力」を身に付けるために必要な要素となる力を国語科や他教科から洗い出し、各学年の系統性を考慮したうえで、スキルのものを継続して取り立て指導していくことである。

そのことと合わせて、国語科と他教科の、またはその他に共通する自己表現力の要素となる力を見極め、より効果的に一人一人の児童に身に付けさせることのできる学習活動を構築していきたい。その際には、一人一人が自ら課題をつかみ、自ら追究し、課題の解決に向けて表現し合うそれぞれの場において、より自分らしさを出すことのできるような学習過程を組む必要がある

う。

このように、「自己表現」するためのもととなる力を確実に身に付けていくような学習活動を取り入れ、自己表現を経験する段階、自己表現をしようとする段階、自ら自己表現する段階と高まりを意識した教育課程を編成し実践していくことにより、より多くの児童が関わり合いのなかで、生き生きと自分らしい表現をする姿になることを、本研究では目指している。

(2) 研究開発課題

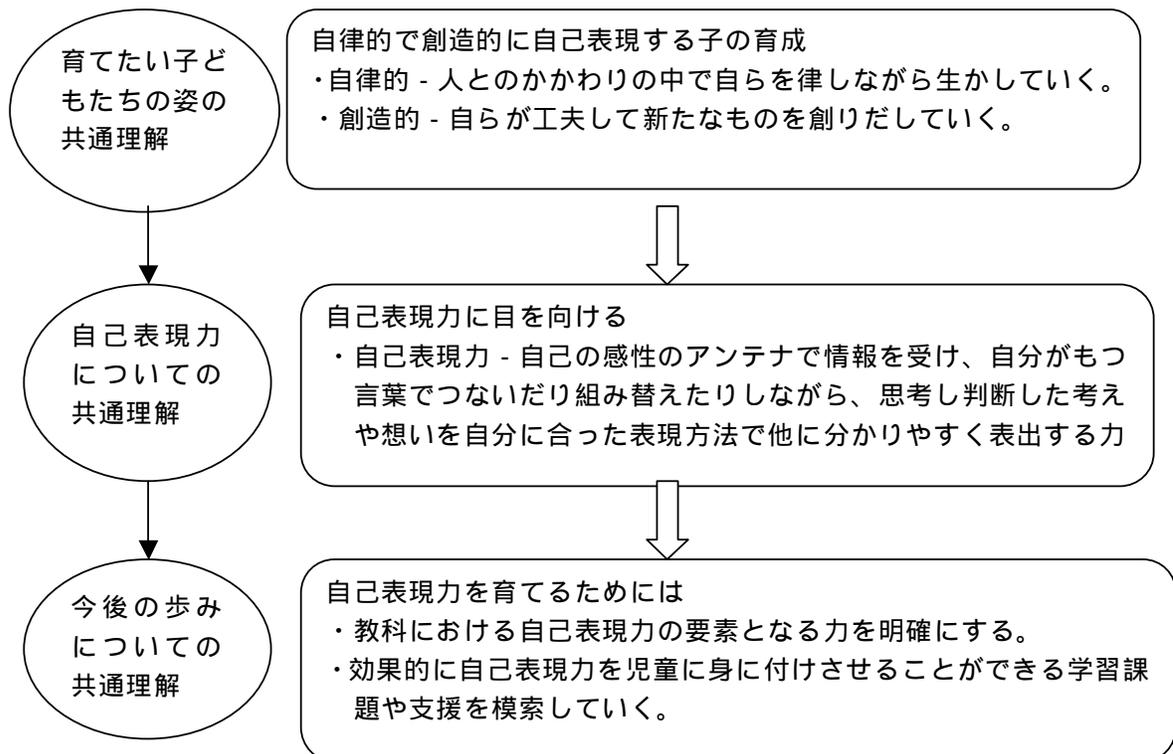
自己表現力の育成を目指した国語科と他教科との関連による教育課程の改編

(3) 研究概要

米泉小では、「伝え合う力」の育成を目指し、国語科を中心に「話すこと・聞くこと」領域のカリキュラム開発を進めてきている。この研究をもとに、さらに個性豊かで創造的な考え方や生き方の基盤となる自己表現力に目を向け、自律的で創造的な児童の育成を図りたいと願ってきた。自己表現力とは、「自己の感性のアンテナで情報を受け、自分が持つ言葉でつないだり組み替えたりしながら思考し判断した考えや想いを、自分に合った表現方法で他に分かりやすく表出する力のことである。」と定義している。認め合う雰囲気のある学習集団の中で考えや想いを表現し合い、自ら振り返ることで、よさや不足を自覚し、自己表現力は高まるととらえている。この力は、学校生活や実生活の場において生きる実践的なものであり、自己を形成していくうえでも欠かせないものである。

自己表現力を育てるためには、まず、各教科における自己表現力の要素となる力を明確にし、共通して育てることのできる要素を見極めることが必要である。さらには、より効果的にそれらを児童に身に付けさせることができる学習過程や支援を模索していくことが有効となる。

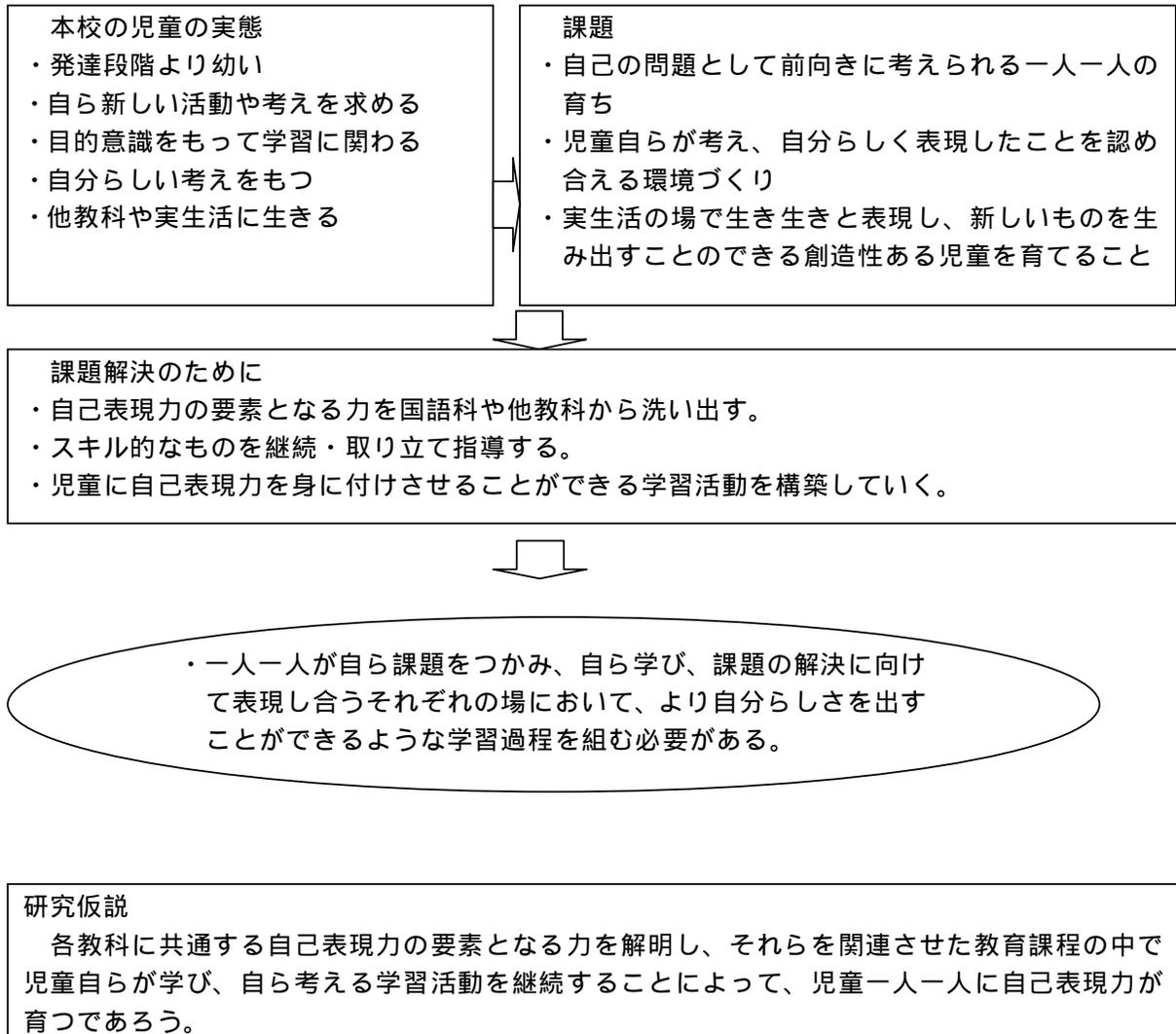
従って、本研究では、国語科を中核としながら、他教科の自己表現力の要素となる力との関係を見出したり、一人一人が自己の問題としてより前向きに考え、自分らしさを発揮することができるような学習の場や活動の場を明確にした教育課程を模索し、「自己表現力」を軸においた教育課程を編成していくことを目指している。



(3) 研究目的と仮説

研究に取り組むに当たって文部科学省からの指定は「教育課程の改編」であった。研究開発学校である以上、「教育課程の改編」という壮大な目標ばかり意識されると、目の前の子どもたちと意識が離れることになることを危惧した。「研究者」の立場ではなく、子どもたちとともに歩み成長する「授業者」であることを確認している。

また、米泉小の児童の実態をとらえ、課題を明らかにし、課題解決するためにどのような手立てが考えられるかを構築し、研究仮説を立てた。



3 教育計画への校内研修の位置付けと展開

(1) 校内研修の展開における基本的な考え方

米泉小では、まず、「3カ年の大まかな方向付け」をし、次に、「大まかな年間計画」を立てている。ある程度、見通して歩いていける土壌作りを研究推進部で話し合いながら進めた。研究の路線を研究推進部が一方向的に敷いて、その実践を全員がするという方式では、方向付けはできても研究の硬直化となる。それだけは避けるようにしてきたようだ。

特に、研究推進部としては以下のことを心がけ、研究体制を整えていった。

一人一人の職員の力こそかけがえのないものであるという意識を大切にすること
一人一人の実践の方向付けを、ある程度明確にしていく道筋づくりをすること
一人一人の実践を生かし、全職員に広めて、個々の実践を理論的につなぎ合わせるよう試みる
こと

等を研究推進部の努めとして歩んでいる。

具体的には

研究を進めるに当たって、現時点での重点は何かを絶えず全教職員が理解できる場づくりをした。また、「分からない」という声を大切にしていた。

一人一人の実践は、全体研、分科研に限らず、通信の形でまとめていくこと。そして、**必ず全教職員に広めていく**こと。と同時に、いただいたことを理論に戻していく試みをする。研究推進部チーフは都合上授業を見られなくても、ビデオ等で授業を分析し、それを全体の場に広め、研鑽を深めることを心がけた。

研究の方向と違うのではないかという実践にこそ、次へのステップがあることが多い。一人一人の創意工夫を見出し、みんなで語り合う場を設けていくことを心がけた。

職員の創意工夫や心を大切に思う研究であることを心がけていることがうかがえる。それが、目の前の子どもを大切に思う研究へとつながると思われ、実践している。

また、研究の方向として、学習面だけではなく生徒指導や特別活動の面においても、自己表現力を高めることが模索されている。

生徒指導面においては、自己表現力が生活面でも生きることを目指している。何より、人間関係の基盤は、「心のつながり合う喜び」から生まれる温かい人間関係づくりが大切であるからである。そのためには、自ら考え、決定、行動する場や、お互いがある存在を認め合える場を多く設けている。そうすることで、一人一人がクラスや学年、学校、地域、社会において、かけがえのない大切な一人であることを意識し合えるような歩みを行っている。

特別活動面においても、自己表現力があらゆる児童活動面で生きることを目指している。そのために、「人間教育につながる自己表現力を生かし、育てる場」ととらえている。児童会活動・クラブ活動・仲良し活動(縦割り)・学校行事の場における子どもの実態と目指す姿を明確に持ちながら、活動案検討、および実施してきている。また、目指す姿への過程として「自己表現力」がどのように表れていたかを、絶えず振り返りながら歩んでいる。

(2) 教育計画への校内研修の位置付け

ここでは、研究開発学校として、全国公開研究大会が開催された前年の平成 15 年度の教育計画への校内研修の位置付けをみてみたい。6月から1月まで毎月研究授業を行い、机上の空論ではない授業実践から取組をしている。

月	行事	研究授業	研究の歩み(流れ)	全体研究会(研究推進部提案)
5	クラブ発足 5年合宿 体力作り走 スクールフォー ラム		・米泉カリキュラム確認 目指す子どもの姿話し マイタイム おはようタイム実施計画確認 ・ひびき合いタイム立案 スクールフォーラム検討 計画訪問全体研立案	全 : 目指す姿とつけたい自己表現力提案と 共通理解 主題、副題確認、指導案提案 学 : マイタイム+おはようタイム実施計画 検討会 スクールフォーラム提案 ひびき合いタイム、大会研究授業提案 計画訪問全体研立案検討
6	なかよし遠足 プール開き	A教諭 B教諭 C教諭	・年間計画把握、三年次までの見直し 立案 ・運営指導委員会指導助言紹介(全体 研にて) ・文部科学省からの指導助言紹介と今 後の研究方向検討	全 : 文部科学省(東京)での助言紹介今後 の方向性についての提案 年間計画とこれからの見直し提案(三 年次も含め) 研究授業振り返り、通信発行
7	個人懇談会(3 日)	D教諭 E教諭	・夏季研修計画立案検討 (1学期カリキュラム修正検討) (国語科カリキュラムづくり) (大会指導案づくり)	研究授業振り返り、通信発行 学 : カリキュラム修正検討会と修正案提出 全 : 夏季研修について提案 全 : 国語科カリキュラムづくりについて提 案
8			・国語科カリキュラムづくり (領域別年間カリキュラム) ・井上先生を交えての会 ・研究紀要作成 ・大会指導案作成と検討会	分 : 指導案検討会
9	6年合宿 育友会バザー 連合体育大会	F教諭 G教諭 H教諭	・大会指導案校正 ・大会指導案提案と共通理解 ・研究概要原稿提案 ・分科会形式検討と提案 ・大会紀要原稿締め切り、製本	全 : 大会指導案提案と共通理解 全 : 研究概要原稿提案と分科会形式提案 分 : 分科会司会、記録等決定 ・大会紀要原稿締め切り、製本 研究授業振り返り、通信発行
10	運動会 前期終業式 後期終業式 5年連合音楽 会	I教諭 J教諭 K教諭	・分科会提案原稿検討 ・研究会当日仕事流れ、分担発表	全 : 研究概要プレゼンテーション 分科会提案原稿プレゼンテーション 全 : 研究会当日仕事流れ、分担理解 研究授業振り返り、通信発行
11	文部省中間発 表会	大会授業 L教諭	・司会者打ち合わせ 文部省中間発表会 ・全体会を受けて今後の課題と方向性 検討	全 : 会場設置+リハーサル 文部省中間発表会 全 : 指導助言紹介と反省会 全 : 今後の方向性発表 研究授業振り返り、通信発行
12	個人懇談会(3 日) 米泉フェスティ バル	M教諭 N教諭	・来年度文部省発表会(全国国語大会 をも兼ねる)について検討 ・各教科、マイタイム、ことば・読書 の時間、おはようタイム等、実践の まとめ原稿形式立案および原稿依頼	全 : 来年度文部省発表会(全国国語大会を 兼ねる)についての検討会 研究授業振り返り、通信発行
1	なわとび週間 スケート教室	O教諭 P教諭	・第2年次「文部科学省報告書」研究 理論部分作成	・国語科カリキュラム完成(領域別) 研究授業振り返り、通信発行
2	6年生を送る 会		・第2年次「文部科学省報告書」作成 および提出 ・マイタイム、ことば・読書の時間、 おはようタイム案修正カリキュラム 作成依頼	・実践のまとめ原稿提出締め切り 全 : マイタイム、ことば・読書の時間、お はようタイム案修正カリキュラム作 成について
3	卒業式 終業式		・第三年次の研究方向立案 ・第三年次本発表、および全国国語大 会等について詳細を提案	全 : 第三年次の研究方向提案と意見交換 作成した国語科カリキュラムにマイ タイム、ことば・読書の時間、おは ようタイムとの関連を模索していく ことを提案

(3) 教育課程の特例の内容

研究開発学校であるため独自の教育課程を展開している。

ア 「マイタイム」

いくつかの教科にまたがる要素となる力を支える諸能力を育てる単元や計画的に身に付けてきた諸能力を自由に駆使して自己表現力を育てる単元を設定している。

3 学年 30 時限

4 学年 30 時限

5 学年 35 時限

6 学年 35 時限

イ 「おはようタイム」

「自己表現力」を育成するにあたって、その礎となる主に言語スキルをより確実に身に付けるため、ゲーム的な要素も取り入れながら、楽しく継続的に言語表現する時間として設定している。水曜日は英語活動、金曜日は国語や算数のドリル学習などに当てているが、各曜日については、それぞれの学年の実態に合わせて弾力的な運用をする。

モジュール 1 / 3 時限 × 週 3 回で 1 時間 年間 35 時限

	月曜日	火曜日	木曜日
	国語科（読むこと）	国語科（話すこと）	国語科（書くこと）
低学年	絵本の読み聞かせ いろいろな本の紹介 マイブックを読む （同一作家、他の領域）	発声・発音・早口言葉 スリーヒントゲーム 一言スピーチ、詩の暗唱 にじゅうのとびら	単文視写（教科書教材） 文・段落意識をつける 5W1H文ゲーム
中学年	本の読み聞かせ マイブックを読む 友だちに本を紹介する （読書記録を振り返る）	スピーチ（夏の思い出） ストレオゲーム 詩を読む（工夫して） リレー読み（表情つき）	スピーチメモ 視写（詩、説明文） ことばのピンゴゲーム ローマ字練習
高学年	マイブックを読む 好きな作家の本を あまり読まない本を 古典のよさを見つけて	スピーチ、最近のニュース おすすめの本紹介 3分速読、お話の要約 ミニ討論会	5分視写（詩、説明文、社説） 百字文（友だち、家族、自分を紹介） 詩

ウ 「読書・ことば」の時間

「読書の時間」

「読書」は、語彙力、言葉からの想像力、思考力、集中力を児童につけることができ、自分らしさを表現することにつながる活動として設定している。

・低・中学年 週 1 時間 年間 35 時限

・高学年 年間 15 時限

「ことばの時間」

自分らしい言語感覚を養い、豊かな感性を磨くために有効な「俳句作り」の活動や、言葉遊びなどを取り入れた「ことば」の時間を設定している。

・低・中学年 15 時限

・高学年 20 時限

(4) 平成 16 年度の教育課程の概要

金沢市は、「『世界都市金沢』小中一貫英語教育特区」に認定されている。平成 16 年度から金沢市内のすべての市立小中学校において小中一貫英語教育を本格的に実施している。移行措置期間を経て、平成 18 年度からは、小中一貫英語カリキュラムを完全実施する予定である。

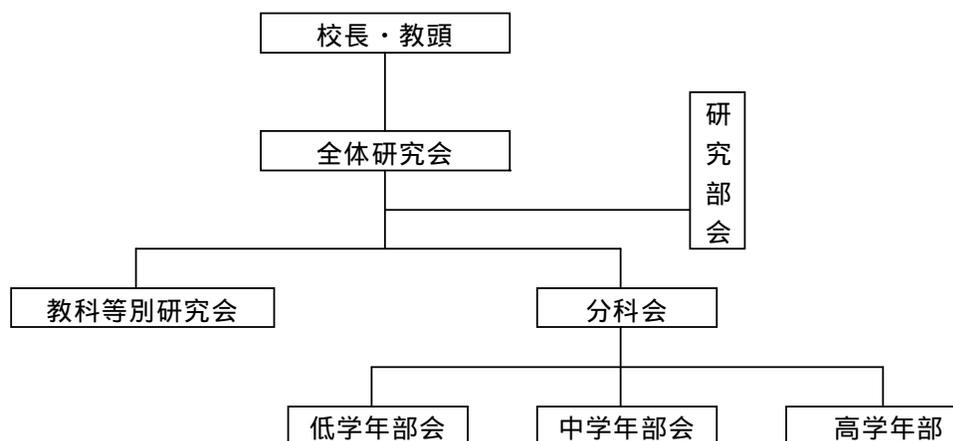
ここに示す「教育特区」とは、構造改革政策の一環で、既成の法律などに縛られずに、教育の分野で先進的な取組をする学校や地域を、国が認定し、その取組を支援することである。

		1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
教 科	国 語(総時数)	3 0 7	3 1 5	2 7 0	2 7 0	2 1 5	2 1 0
	国 語	2 2 2	2 3 0	1 8 5	1 8 5	1 4 5	1 4 0
	おはようタイム	3 5	3 5	3 5	3 5	3 5	3 5
	読書・ことば	5 0	5 0	5 0	5 0	3 5	3 5
	マイタイム			3 0	3 0	3 5	3 5
	社 会			7 0	8 5	9 0	1 0 0
	算 数	1 1 4	1 5 5	1 5 0	1 5 0	1 5 0	1 5 0
	理 科			7 0	9 0	9 5	9 5
	生 活	1 0 2	1 0 5				
	音 楽	6 8	7 0	6 0	6 0	5 0	5 0
	図 工	6 8	7 0	6 0	6 0	5 0	5 0
	家 庭					6 0	5 5
	体 育	9 0	9 0	9 0	9 0	9 0	9 0
	英 語			3 5	3 5	3 5	3 5
	道 徳		3 4	3 5	3 5	3 5	3 5
学級活動		3 4	3 5	3 5	3 5	3 5	3 5
総合的な学習の時間 (削減時数)				4 0 (- 3 0)	4 0 (- 3 0)	4 0 (- 3 5)	4 0 (- 3 5)
計		8 1 7	8 7 5	9 4 5	9 8 0	9 8 0	9 8 0

4 校内研修を推進する組織体制作り

(1) 研究組織の概要

研究組織の概要は、以下のとおりである。



(2) 運営指導委員会

運営指導委員会は、校内だけではなく授業内容に関連する関係機関や専門家など、外部助言者を招いて行っている。

所 属	職 名	備 考（専門分野等）
星稜女子短大	講師（元学長）	英語教育、民俗学
金沢大学	講師	教育課程
県教育委員会	課長補佐	教育課程一般、算数科教育
県教育委員会	指導主事	教育課程一般、生活科教育
市教育委員会	主席指導主事	教育課程一般、理科教育
市教育委員会	指導主事	国語科教育、図書館教育
米丸小学校	校長	石川県国語科教育研究会小学校部長 金沢市小学校教育研究会国語部会部長
清泉中学校	校長	
米泉小育友会	会長	
米泉公民館	館長・元学校評議員	

5 授業研究を中心にした校内研修の在り方

「目の前の子どもたちの成長をまず大切にし、それをみんなの喜びとしていく」。それが米泉小の研究の変わらない姿勢である。子どもたちの日々の姿を何より心の糧としてきた。特に留意してきた点については、以下の点である。

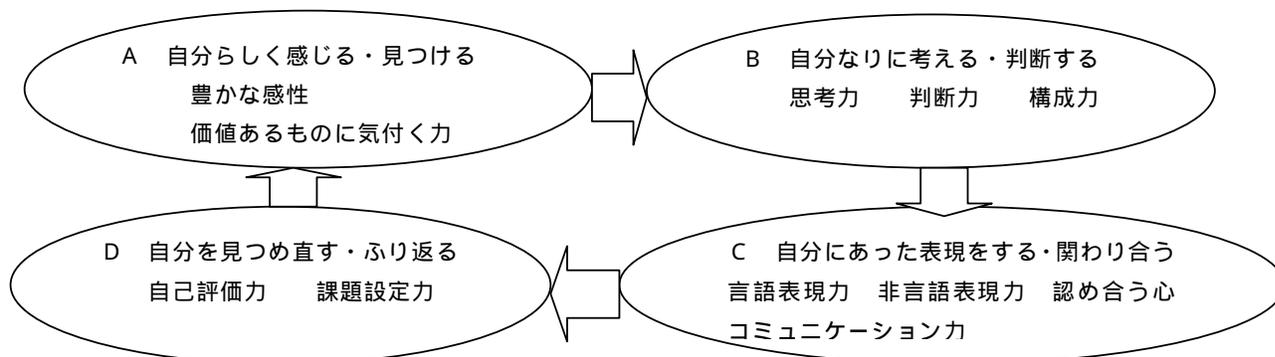
子どもたちの姿や作品から、研究の方向を見定めていくこと。絶えず、子どもたちの姿について話し合う中から、研究開発を進めてきたこと。
一人一人の授業実践から一人一人の通信を発行し、全教職員に広めていくこと。
一人一人の授業実践をつなぎ合わせて、理論化を図ること。

(1) 教科にまたがる表現方法・活動の洗い出し

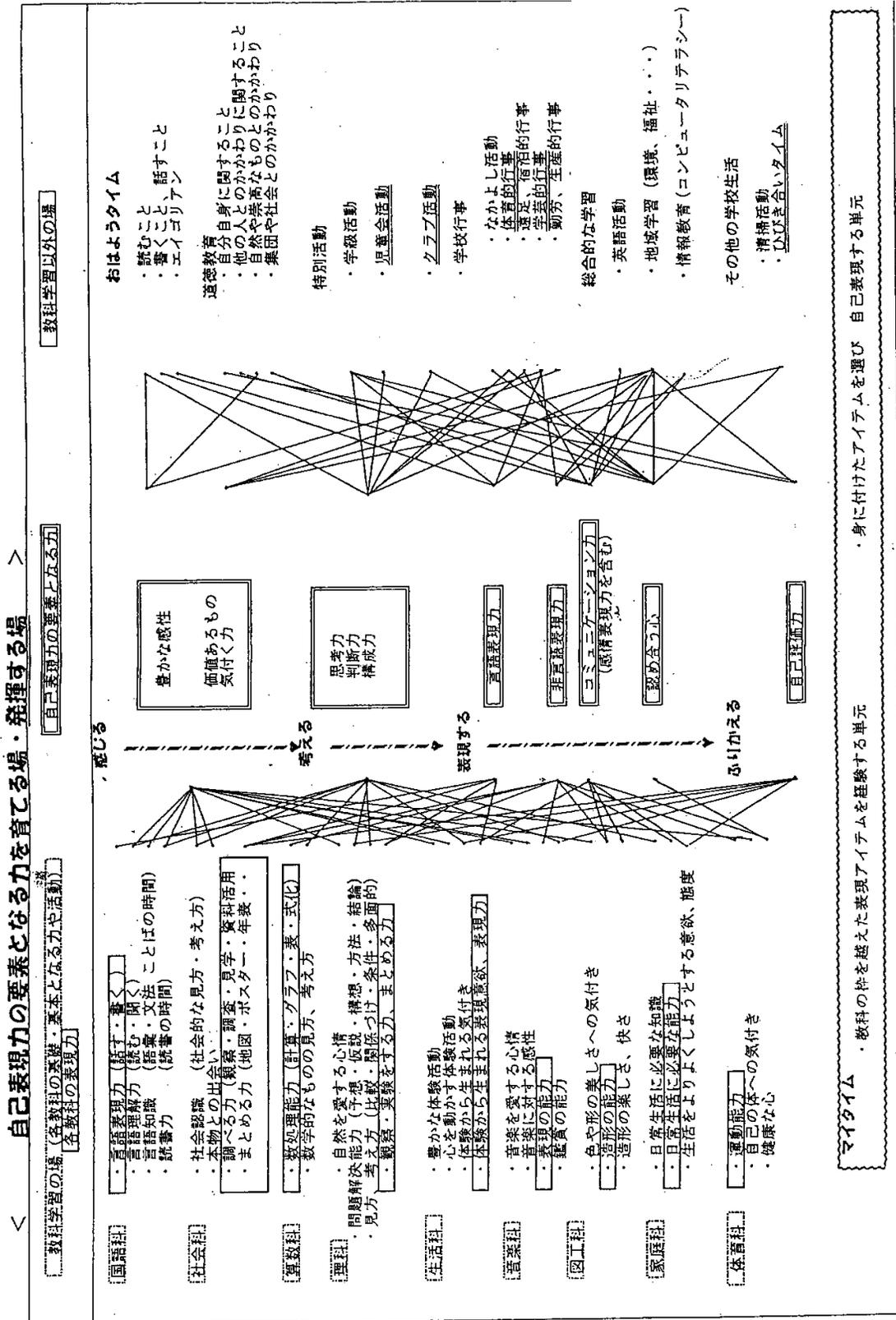
1年生から6年生までの全教科において、具体的な学習（表現）場面で使うことのできる、共通に取り扱われている表現活動や、各教科でどんな表現力を身に付けることをねらっているのか等を洗い出す調査研究を行っている。

(2) 自己表現力を育成する学習過程

学習・活動サイクルに沿って、自己表現につながる要素となる力を次のようにとらえ、A B C Dを繰り返し、自己表現力を身に付け確かな自己を形成することにつなげている。



(3) 自己表現力の要素となる力・関連図



(4) 研究推進部の通信(一部抜粋)

離れてしまう。この子には「たのびにしやがんでオタマジャクシを見つめる心のゆとり」があつて新聞にはそういつた視点で見る余裕がなかった。この子どもは自分で心算を著り添えの指導を展開しようとしていたなら、上記の二つの理由でかたづけられることはなかったと思われ。そうなる。教科書の表現力洗い出しに加えて、もつと遠く教師の尻方が必要となる。そんな普段の私達の失敗教の話し合いからカリキュラムが刺られていくと楽しいかもしれないね。(そんなこととしていたなら完成しないか)。何よりゆとりから心生まれるものがあるような気がします。

◇心のつばややかみから
心算れる子ども達(自分より弱いと思う人をいじめていく、ちよつとしたことだけで引けてしまつて修正が利かなくなり、心算い絵を描いて喜んでる等)、そして不登校児等、どこの学校でも問題になってますね。

◎それぞれが心に傷を負つていて、そこから来るのでしよう。現代社会で子ども達はいろいろな家庭生活状況の中で生きています。その状況自体は変えようにも変えられないのが現状ではないでしょうか。自分の思いを表現したくても、その表現方法がわからずにはやみくもに萎れたり、人をいためたり、自分を心自身を傷つけて引きこもることになつたり(もちろんそんな単純には考えられないで、引くという方法で自己表現できたりもありません。そんなときに自分の思いを少しでも「書く」という方法で自己表現できたら…)。思いを言葉に託して人に語る術があつたら…。そう思えてなりません。その子たちが心にとどまる思いを自己表現する術を持つていたならば、周りのもつと。その子の心を理解できるだろうし、何より本人が自己を見つめ直すことができるような気がします。「自己表現力を育成するカリキュラムづくり」と言いますが、こんな視点で思いを育てていくのはやっぱり愛なのかなあ。

◇研究推進部会から
子ども達が送つてくれた手紙。そこには甲子園の落ち葉と手紙が引越してついでに、落ち葉をプレゼントとして包む心、そしてそれを説明していい手紙の言葉。お返しに私達が手紙を送りました。その子のお母さんが曰く「枕元にはみんあなからもらった手紙を置き、そしてあの子はみんあなからの手紙を体に抱いたまま眠たのです。」と。

◎自己表現力を考える上でこれから私達が忘れてはならないこと、自己表現力は表現力をつけるという思いだけで突き進むと難しいでしょう。表現力は伝えたい心を何より大切に磨かねばならないものです。これから具体的に言語科の年間カリキュラムを作成していくことになるでしょう。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語領域等」で自己表現力の洗い出しをして、他との関連を考えながら、作業していくこととなりましょう。しかし「書く」を自己表現ととらえて「どうやって書かせると力がつかうか」としてだけ扱つては、他との関連は考えないままに、作業のしやすさがあるのだとか言う意識だけは忘れたくないものです。子ども達に合わせた力と時に、大きな根を忘れないものにしていくといいですね。

◇研究推進部会から
6年生を送る会では「ありがどうの気持ちや伝えよう。」の心で、子ども達に任せたい会であった。自分たちがそのめあてで出てくること、自然にグループが出来てき

今年度の歩みと考えるうえで

昨年度、考えていただいた研究の骨組みを大切にしながら、今年度はその骨組みをあらゆる場面で、計画、実行、検証していく年として、子ども達の実践を土台にしてながら、骨組みを時には変更修正しながら、肉付けしていくことかと思つています。いろいろな子ども達の姿(あらゆる面)を話しながら歩みたいと思つています。研究推進部会での話し合い、最近の子ども達の様子から、四部会の方の思いなどを紹介します。歩みを考える上で大切なこともあるかと思つています。

◇研究推進部会から
なかなか思いを語ろうとしても、言い出せない、書こうとしても書き出せない子がいます。「なぜなのか」「それを解決していくのが自己表現力の育成に関わるのじゃないかな。そこに目を向けていくのが大切だと思つ。」

◎「なぜ書けないのか?」そう考えて歩むのは教育の原点ではないでしょうか。私たちはまずその子の子の心に思いを書かせなければならぬのでしよう。この方の言葉を聞いて心からそう思いました。「書けない理由って何なのかなあ。」教師の頭には次の2点が浮かびます。

- ①思いはあるのにうまく表現できないので書けない。(内言があつて外言がない。)
- ②思いが生まれてこなくて、書くことが出来ない。(内言も外言もない。)

でもこれらの理由で解決できないこと、書くこと、文章を全く書こうとしない子がこんな時を書いたことがあります。



全く書くこともしなかつた子どもがこういつた詩を書いたとき、うれしいと同時に、自分自身のいたならなさに受け取りますね。これ以上記す理由の二つとも当たつていませんよ。この子はうまく表現できないのではない、かといつて思いが生まれていないわけでもない。理田は文章を書く上で教師の関わりをまですささがあるのです。書かせようと教師が手だてを持ち、がんばればがんばるほど子どもの意識は

6 教師一人一人の研究・研修意欲の高め方

研究推進部として、校内で確認した内容を以下に述べる。教師一人一人の研究・研修意欲を高めるためには、まず、研究チーフとしてどのような姿勢で研究・研修に取り組むのか、学校組織を視野に入れた研究主任としての在り方に言及している点が大きな特徴である。

研究チーフにあたる人は、まず年間、次に、年間を越えた見通しをもつこと。

子どもたちの話題を中心に語り合う場の設定を多く持つこと。生徒指導、特別活動と研究は、三位一体のものであるとの意識で、問題行動があったときは、研究の面からも解決の糸口を模索すること。

管理職と職員とのパイプ役としての役割を研究チーフは認識すること。絶えず、連絡を取り合い、円滑な学校運営に心がけること。

一人一人授業者の創意工夫が出るような研究や幅やゆとりを持つこと。研究チーフは研究の方向性は持っていても、一つの考えに固執しないこと。

幅広い全国の動向を紹介する資料を作成・配布して、見聞をお互いに広めていくこと。

大学教授や地域、保護者の方々等、有識者からの意見をいただき、実践に生かすこと。

一人一人の貴重な実践を全教職員に広めていくこと。どんな実践でもやりっ放しに終わらせないこと。「分科研」も大切な提案であり、全体に広めていく努力をすること。

職員の疑問等をいつでも受け入れられる姿勢を大切に歩むこと。

「子どもたちを中心にした話題づくり」「研究としての理論の裏付けのある実践」の両面のバランスを取るよう心がけること。そのどちらかにだけ傾いても、研究は停滞してしまうことを認識して歩むこと。

一人一人の子どもたちを目の前にしたときに「子どもたちの成長する姿を教師同士が対話していく環境づくりは心がけたい」「一人一人の先生方が子どもたちの成長のために提案していただいたことを、多くの人に広げていくパイプのような役目はしていきたい」と考え、取り組んでいる。一人一人の教職員が子どもたちのために連携し合い、研究推進部自体を全員の力で高めていったのである。

7 研究開発の成果

(1) 児童への意識調査結果（H16.2.16）

設問	回答人数	回答内容	人数と割合	前年
学校は楽しいか	330名	とても楽しい・楽しい	295名 89%	未調査
勉強が楽しいか	330名	とても楽しい・楽しい	215名 65%	63%
国語の勉強は楽しいか	330名	とても楽しい・楽しい	216名 65%	54%
国語の勉強は大切か	330名	とても大切・大切	287名 86%	79%

この設問の結果から、9割の子どもが学校を楽しい場ととらえている。実に8割近くの子が、国語の学習の価値を見出して、その中でもかなりの割合で学習が楽しいと実感している。また、この一年間で本を読むことが好きになった子の割合が6割に達しており、これは「おはようタイム」や読書力育成を大切にした歩みの成果であると言える。

(2) 意識調査結果の考察

「勉強が楽しい」「国語の勉強が楽しい」「国語の勉強は大切か」「本を読むことは好きになったか」の項目において前年から伸びを示している。また「学校が楽しい」とする子どもたちも9割

に達しており、これは本研究開発の継続実践の成果と考えている。

平成 16 年度は、特に平成 15 年度（1 年次）の基盤の上に「自己表現力の要素となる力を支える諸能力を切り込み口とした授業実践」に取り組んできている。自己表現力を支える諸能力それ自体を高める授業実践では、児童は概ね「楽しさ」を感じ取っているのはもちろん、「自分で考えてつくることができた。」「自分たちで考えて実行できた。」等自らが喜びをもちながら学習を進めて学び取っていく自己学習力を身に付けてきている。

これら自己表現力の要素となる力を支える諸能力を切り込み口とした授業実践では、学年間、教科間の力の系統性、諸能力同士の関連性を意識した取組をしてきた。これにより、自己表現力育成において、より効果的な関連を意識した取組となり、「友だちの宝物を聞いていたらわくわくしてきた。」「自分の楽しみを分かってもらえた。」「みんなの発表を聞いていたらいい気持ちになってきた。」「協力して仲良くなれた。」「ドキドキして何？何？と気になり楽しかった。」等、人と関わり合いながら自己表現していく子供達の姿となって表れた。「学校を楽しくするためにできること」においても自分らしさを大切にしたい自己の思いが出ており、これら子どもたちの思いを大切にしたい研究開発の歩みであると考えている。

おわりに

今日の教育課題として、各学校の特長を生かした教育を行うことや、一人一人の児童の個性の伸長を図る教育が挙げられる。これからの教員に求められる校内研修の在り方の一つとして、実際の授業を通して子どもたちの学習に生かされ、一層効果を上げるものとして機能させることが重要であると考えられる。

米泉小の校内研修は、学校教育を支える教員の資質・能力の向上と指導力の改善だけでなく「これからの時代に求められる国語力について」の答申にも明示されている「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育」としても、大いに参考になるであろう。

今、大きな転換期を迎えている学校教育において、本実践事例が、各学校の校内研修の改善・充実のための一助になればと願っている。